子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2003年3月　NO.112

「四ツ橋風景」　近石春江

〈もくじ〉

ガンバレ「かるぽーと」……池永昭文　2
公民館とともに ……藤村健次郎　3
座談会「市民の文化活動とかるぽーと」……4～7
昼下がりのかるぽーと「並」で勝負の2年目 …… 小笠原雄次　8～9
平成15年度高知市文化プラザ自主事業のご案内 ……10～11
公演『純信 お馬』に寄せて……吉本智賀子　12
フランス・アングレーム市探訪記 ……奥田奈々美　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

ガンバレ『かるぽーと』

池永昭文

高知市文化プラザ「かるぽーと」が、四月の爽やかな風を帆いっぱいに受け、市民の大きな期待を担って船出してから早、一年が経とうとしている。

「物の豊かさ」から「こころの豊かさ」へと言われるなかで、かつての市民の台所・卸売市場や菜園場、農人町など、物流の中心であった九反田に姿を現した巨大な帆船……。文化ホール、市民ギャラリー、横山隆一記念まんが館、中央公民館と、さまざまなジャンルに対応できる、高知市民が待ち望んでいた文化の拠点である。

文化創造の場、舞台芸術発表の場、鑑賞の場、学習と成果発表の場、交流の場、情報発信の場と、ひと所で色々な文化に出会い、活動ができる「かるぽーと」。

新しい文化の港から、世界に向けての新しい取り組みも始まった。

わが県民文化ホールや美術館にとっては、強力なライバルの登場である。

「かるぽーと」を運営・管理するのが高知市文化振興事業団。

県民文化ホールのような文化施設の管理を主とした財団ではなく、自由な立場から自主事業を実施する、全国的にもユニークな存在であった事業団。施設を持たない身軽さを生かし、市民と結びついたさまざまな取り組みや、芸術文化だけでなく、生活文化から文化都市づくり、と幅広い活動を展開してきた事業団。

それが「かるぽーと」という素晴らしい活動の場を手にした。

まさに、「鬼に金棒」だ。

これまで市民とともに歩み、培ってきたノウハウや実績を生かして、公共施設の管理という固い枠にはまったり、縛られることのない運営を心がけてもらいたい。

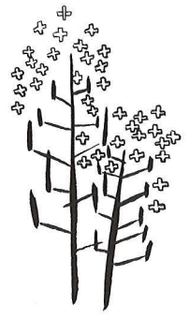
盛りだくさんの多彩な開館行事をこなしながら、顧みる暇もないほどに多忙で、手探り、試行錯誤の繰り返しと、苦労も多いが実りの多い一年ではなかったでしょうか。

が、まだ一年。スタートしたばかりです。

「かるぽーと」の持っている最新の素晴らしい機構が、十分にその機能を発揮できるように職員の皆さんも、機械操作は業者まかせではなく、使って馴れる、馴れて親しむ、身につけ体で覚える、それが、三年先、五年先……施設の保守管理、運営に生きてくる。

市民の文化活動のお手伝いをする「かるぽーと」。設備の充実はもとより、皆さんに、気持ちよく楽しく使っていただいて、喜び満足していただくよう、よりよい施設づくりを期待しています。

県民文化ホールは、貸し館が主、自主事業は買い取り公演が主です。



「かるぽーと」がオープンし、文化施設を利用できる機会が増え、目的に応じた施設を選びやすくなりました。

お互いに、よきライバルとして、切磋琢磨し、機能分担を図り、連携して高知の文化の向上、振興発展に尽力していきましょう。

愛される「かるぽーと」、さらなる飛躍を願っております。

「かるぽーと」ガンバレ!!

（いけながあきふみ／高知県立県民文化ホール館長）

公民館とともに

藤村健次郎

中央公民館が新設のかるぽーとの中に移転して一年になるという。

エレベーターでなければ行けないという不便さはあっても、ゆとりある施設は申し分ない。かるぽーと前の車道や、はりまや橋電停からの歩道の整備が進めば、もっと利用者も増えるだろう。

高知市の戦後の復興が一段落した一九五一年、中央公民館は市民の文化に対する渇望から生まれた。

学生であった頃はよく夏季大学に通っていた。電車の始発も夏季大学の朝六時の開講に間に合わせていたが、散歩がてら歩いて通っていた。

その頃公民館は、今の丸ノ内緑地にあって、お堀には蓮の花が咲いていた。ホールがあり、演劇、オペラ、バレエ、映画会などさまざまな催しが開かれた。藤原歌劇団のオペラ「椿姫」など記憶に残っている。

市役所に入って社会教育課に配属され、自ずと公民館の仕事に関わってきた。

当時は市の職員が勤務する事務所の他に、演劇や音楽の観賞団体の事務所があって、そこには劇団や音楽関係の人たちが出入りして賑わっていた。その他、市民学校など公民館講座の講師や高知文学学校、花いっぱい会、ペンクラブの関係者など多数の人が出入りしていた。まさに文化の殿堂にふさわしい活動が行われてきたのである。

一九七四年、異動で公民館に勤務するようになった時は、老朽化が進み、鼠と白蟻のすみかだった。朝出勤してみると、机の上に雪のように白蟻の羽が散らばっていたことも何度かあった。

それでも館長室には、志賀直哉氏から寄贈された山脇信徳作の名画が飾ってあって、毎日見るのが楽しみであった。それも台風の際雨漏りがあって、郷土文化会館へ寄託したが、今は美術館で時々展示されるので安心である。これらは高知市民の大切な財産であることは間違いがない。

公民館の改築運動は堀の内へ建てることで進めてきたが、史跡内の建設は認められず、県民文化ホールとの併設の形で移転改築された。本来史跡内への建築物は認められるべきでなく、県庁も改築の時は別の場所へ移転するだろう。

開館を記念してとり行われた公民館結婚式。昭和27年から54年まで行われていた。

一九七六年、県民文化ホールと公民館は記念行事であるN響の交響曲「新世界」で開館した。

公民館部分は狭小であったが、多くの教室を持ち、さまざまな学習活動が行われた。一階には展示室もでき、学習の成果も発表できるようになった。事務室はあまり広くはなかったが、講師や、受講生、当時は自治公民館の学習活動も担当していたので、自治公民館の関係者もよく出入りしていた。公民館には談話室はなかったが、館長室や事務室の応接セットがその役割を果たしていた。

公民館の役割は、集まるところ、学ぶところ、つなぐところ、とよく言われる。新しい公民館は私の見るかぎり、施設設備は素晴らしく使い勝手も良い。事業も市民の学習要求に応えて幅広い層に浸透している。公民館の利用だけでなく、他の施設も活用してくれるだろう。

だがこれからの課題は「つなぐ」ということだろう。講師と受講生、団体グループ間、利用者と職員、これらのつながりの場をぜひ考えてほしい。せっかく素晴らしい公民館ができたのだから、お互い助け合って、有効に活用されるよう期待したい。

（ふじむらけんじろう／元高知市立中央公民館館長）

座談会

『市民の文化活動とかるぽーと』

［出席者プロフィール］　（五十音順）

◎岩神 義宏
国際デザインカレッジマンガ科教員　市展デザイン専門部員
まんが家　高知漫画グループくじらの会事務局

◎北村 真実
丸ノ内高校音楽科時間講師　高知福祉専門学校非常勤講師
高知コンサートグループ事務局長　高知ポップスオーケストラ所属
四国サロンコンサート協会主宰

◎下山 郁夫
TOSA・美術アカデミー主宰　市展洋画専門部員　市民ギャラリーの会

◎高橋 啓継
高知フライデー・ウインド・アンサンブル所属　高知市文化協会
高知市文化祭のミュージカルの制作にかかわる

◎西村 和洋
演劇集団S.T.H.主宰　高校教員　高等学校文化連盟演劇専門部事務局
地元若手劇団の合同公演をかるぽーとで主催

――この一年かるぽーとは、皆さまはじめ市民の方々と共同で行った事業（市民共催事業）や、オペラ、バレエなど海外からの招聘を含む自主事業、そして高知市文化祭や公民館における各種の生涯学習事業、さらに横山隆一記念まんが館事業を行ってきました。
まず、それぞれの立場から一年の事業の感想やかかわりあいなどをお聞かせ下さい。

●岩神　まんが館には、開館時からお世話になってきました。特に自分も所属している高知漫画グループくじらの会と高知漫画集団の合同原画展をまんが館と共催で行えたことが、高知のまんが文化にとって意味のあることだと思っています。
ただ、PR不足なのか、有名作家の原画展でも人の入りが少なかった。、僕たちの世代と違って今の人たちには「原画」というものの魅力が弱いのだろうかと感じています。

●北村　オペラ「カルメン」など華々しい事業の目白押しで、よくかるぽーとに通ったものです。事業はすべての催しに満足したというわけではないけれど、高知でも見ることができたことに意味があると思います。間近に見られることは大きいですね。
また、市民共催事業は、使う側にとって大変ありがたい企画だったし、どんなジャンルの催しでも入場者が多く、地元の人たちのかるぽーとへの関心が高いのを感じました。

――皆さん、出演、主催、出品など、それぞれの分野で活動されているわけですが、かるぽーとを使ってみて、いかがでしたか。

●北村　ホールを何回も利用したなかで感じたのは、対応の変化があったことです。最初は職員の方も不慣れだったのか、行き違い・混乱も見られました。でもこの一年で、設備の面での改善も含め良くなってきています。私もいろいろと意見を言ったことがありますが、そういった市民の声を取り入れる努力をされていると思います。

●高橋　舞台などの安全性は万全で、また利用者の使い勝手も敷地の条件などを考えると十分だと思う。施設への批判もきかれるが、なかには設計の意図、その効果が出ているところもある。ただ、それをわかってもらえるようになるには、まだまだソフト面の工夫や配慮が必要だと感じています。

●下山　この施設は思いきって作ったと思います。文化の拠点としては一等地にあるので、まだ馴染んでない人たちにも徐々に認められていくだろうと思っています。

●岩神　場所的には非常に良いですよ。誰もが参加しやすい立地です。また、あらゆる分野の文化活動が何でもできるし、複合施設のメリットが十二分にあると思います。

●西村　情報発信という点では、まだまだ課題があるのではないでしょうか。一年目は初めてのことが多くて大変だったのかなと思いますが、せっかくの施設、事業ですので今後の情報発信に期待しています。

――さて、高知に「かるぽーと」が出現してから一年になるわけですが、このことは高知の文化状況に刺激や影響を与えているのでしょうか。

●西村　高知県高等学校文化連盟の文化祭は、これまで時期をずらしたりいろいろな会場に分散して、ばらばらにやってきましたが、今回ほぼ同時に一つの施設で行うことができました。
高校の文化クラブは運動部に比べ地味な印象があって、普段どんな活動をしているのか、あまり理解されていないのが実情です。ところが、かるぽーとという一つの会場で一斉に開催できたことで、一般の人にも見てもらったり、ほかの多くの生徒が目にすることにもなって、理解が進む効果があったと思います。
今まで文化クラブの活動に興味のなかった生徒たちも、こうした場所で同級生の活動をあらためて知ることによって、彼ら自身が表現者になるまではいかなくとも、鑑賞者になることにつながるのではと期待しています。

●下山　影響という点では、いわゆるパイの取り合いといわれるような既存の施設との競合にはならなかったのではないでしょうか。そのへんのことをいろいろと心配される向きもあったようですが、結果的に他た。

●下山　ギャラリーの会で展示会をやって、広々とした空間に気持ちよく展示できました。これからも、どんどん使って、時には失敗もして勉強することが次につながると思っています。
ただ、美術展は全国的にみても、印象派ぐらいしか人が入らないのが現状で、「華やぐパリの芸術家たち展」は、めったに見られないキスリングの名作などがあったにもかかわらず、集客という点では苦戦したのではないでしょうか。

●高橋　文化祭のミュージカル「龍馬の夢」で舞台監督を務めました。新しいホールで緊張もあったのですが、大変いい経験になりました。
事業全体としては、あたった事業とあたらない事業はあるでしょうね。せっかく中身がいいのに、僕たちが思ったほどお客さんが入らなかったような。PR不足でしょうか。情報発信の充実が必要ではないでしょうか。

●西村　開館記念事業で地元演劇グループ合同で「ハムレット」を公演しました。全員はりきって取り組み、これからの活動の財産になったと感じています。
観客としては、ベジャール、ナンタなどを高知で見れて本当にうれしかった。やはり一流のものを提供することも大事だと思います。

の施設から一方的にお客さんを取ったということにはなっていません。
逆に利用の幅が広がったし、催しにしても、その施設を生かしたものが増えています。それぞれの施設にはそれぞれの特性があり、役割があります。それは利用する市民にも理解されていて、今後もますます利用が増えていくと見ています。
特にギャラリーは、その名も「市民ギャラリー」ですからね。地元作家の表現活動の活性化に役だっていますね。

●岩神　まんがのことでは、高知はまんが王国と自称しているわけですが、やはり拠点施設ができたことの意味は大きいと思います。これから地元の漫画家や「アンパンマンミュージアム」「はらたいらと世界のオルゴールの館」「まんが甲子園」「黒潮マンガ大賞」などと連携し、イベントと地道な活動の両方をうまく展開してほしいと期待しています。

●高橋　最初は「九反田」に疑問もありましたが、できてみると違和感はないものですね。
今まで、創作活動をしている個人やサークルはもとより、文化協会の各団体でも、ホールやギャラリーの確保にひじょうに苦労していたのは、皆さんご承知のとおりです。施設の数が増えて、発表の場としてだけでなく練習での利用や搬入などの日程に余裕をもつことができるようになって、かるぽーと以外の施設も利用しやすくなったのではないでしょうか。

●北村　高知の音楽家も会場が増えたことで、皆喜んでいます。単純に数が増えたというだけでなく、使いたい、ぜひここで演奏会をしたいと思わせる施設ができたと思います。特に小ホールは高知には今までになかった形態の会場で、使い勝手がいいこともあって、新しい試みがいくつか見られたのではないでしょうか。音響がいいのできっちりした演奏会もできるし、サロンコンサート風のあたたかい雰囲気にもできます。自由な空間を最大限に生かせるのが嬉しいです。
それで、観客として来た市民の方がそれを見て、またもっと色々な使い方で利用してみようと思う。そんな思いが広がっていますね。

●西村　若手の小さな劇団にとっても小ホールができたことは魅力です。小劇場ぽくてよい。

●高橋　そう、小屋的な感覚がある。客席との一体感をもてる。

●西村　大きな会場で一回きりの公演をやるよりも、小ホールで百人ぐらいの観客を相手に五回くらい公演する方が、より効果があり、劇団も成長します。あとは、経済力ですね。会場の使用料自体はリーズナブルだが、連続して使うとなると、僕たちにはけっこうきびしい（笑）。でもそれを目標にしてがんばれる。そうやって力をつけていって……

●高橋　いつかは大ホールで公演を、と（笑）。元気がでてくる話ですよね。

●下山　僕たちのまわりでも、なんというのか、元気になったという実感があります。一年に一度しかできなかった展覧会が二回できるようになったりして、発表、表現の機会が増えると、次への目標もできてきます。

――高知市文化振興事業団は、今後市民の文化活動と、どう連携していくのかが重要な課題となっています。
いわゆる名義後援から、実行委員会との共催とか、財団が地元の芸術家を起用して制作する事業まで様々なものが考えられますが、そのありかたについて、提言をいただきたいと思います。

●下山　実行委員会と財団との共催と言うことで言えば、役割分担について様々なスタイルがあっていいと思います。そこをきちんと協議して、お互いにメリットのあるようにしたいですね。

●高橋　質的な部分で実質的な連携を実現するには、市民と財団が、対等の立場で知恵とアイデアを出し合って企画できる仕掛けが必要ではないでしょうか。

●岩神　芸術家がホールやギャラリーを貸りるという利用のしかただけでなく、事業団が企画をもちかけて、事業団と芸術家が相談しながらできれば、表現する側のもっている案を吸い上げることもできますね。

●西村　実行委員会形式とはまたちがった、ギャラの多少はあるでしょうが、事業団が地元の芸術家をプロとして遇して制作する。そしてそれを継続するという企画も、地元で活動しているものにとって励みになると思います。

●北村　具体的な企画としては、小ホールを利用した地元の音楽家のシリーズなどが定期的にあればいいと思います。演奏を多くの人に聞いてほしいけれども、練習と宣伝を並行してやっていくことはかなりの負担になりますし、個人でがんばっても知り合いだけしか集まらないのが実情です。事業団の企画でやればもっといろんな人が集まるし、観客が増えれば演奏家のレベルも上がってきます。これを続けてやっていくなかで、事業団に声をかけられる、そのシリーズに取り上げられるということが、お客さんに対するアピールになり、演奏家のキャリアになる。そんなシリーズがあるということが、演奏家にとって励みになる。そうなればすばらしい。

――これからの人材の支援、育成という点ではどうでしょうか。

●下山　絵画のジャンルでは、市民学校の次のコースを考えてはどうでしょうか。中級、上級の講座も必要だし、もうその時期にきています。また、修了して作品展をするだけでなく、全国レベルの芸術家を呼んで話を聞いたり、指導を受ける機会を増やす取り組みがあると効果的でしょう。

●岩神　まんがでは、一つは底辺を広げたいと思っています。子どもたちを対象に一定少人数のグループ単位でのまんがの勉強会なんかをやって、子どもたちにまんがに興味をもってもらいたいですね。それから、まんがを描く人は発表の場、特に印刷媒体を求めています。そこで、まんが館が展示だけでなく「まんが誌」を定期発行して地元まんが家を起用すれば、すごい支援・育成になるのはまちがいありません。

●西村　演劇でも、ワークショップを積極的に開いてほしいです。芝居を作るスキルの向上という点で、地方で活動しているとどうしても機会が少ないハンディがあります。
以前事業団が東京グローブ座の俳優を呼んで行った演劇ワークショップなど、作る側からみても非常に有意義だった。
それから芸術・文化をただ表現するだけでなく、批評する目を事業団が中心になって育成してほしい。この頃は新聞などでステージに関する批評などが載るようになったが、まだまだ個人の偏った感想といった段階かなと思う。事業団によって育成された文化を批評できる市民批評家たちが、市民が表現した文化活動を批評して劇評や感想を伝える手段があれば循環する気がする。表現者を育成するワークショップとともに、批評家を育成するワークショップも必要ではないでしょうか。

●高橋　文化協会の立場から言うと、協会は「高知市文化祭」に深くかかわってきました。事業団が「文化祭」を担当することになって、ますます両方の結び付きが強くなるはずです。現在、四月公演の開幕記念行事『純信 お馬』の準備をしていますが、協会はこういったノウハウがあります。事業団も十五年以上の経験とミュージカルなどのノウハウを持っています。千人、二千人ともいう文化協会会員を育てるという意味でも、文化祭などで積極的に文化協会を活用してほしい。お互いに経験しあって勉強させてもらいたいと思います。

●北村　地元の音楽家シリーズがあればと言いましたが、音楽に限らず、地元の芸術家シリーズということで、音楽と絵画、演劇と音楽などを組み合わせての新しい試みも考えられますね。

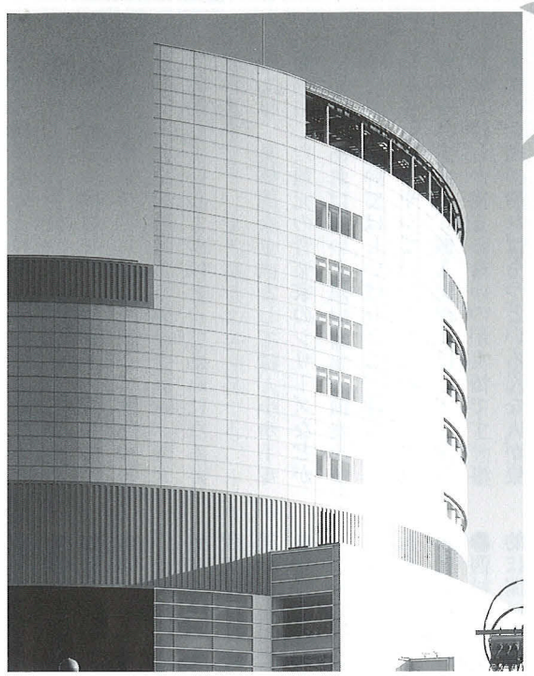
●岩神　高文連の合同文化祭のような、同じ期間でかるぽーとのそれぞれの施設で、あっちでは絵画展をやり、こっちでは演劇の発表がありという方式も効果的でおもしろい。

●下山　いろいろなことができるかるぽーとならではの催しがあれば、いろんな分野の人が集まって交流できてすてきですね。

昼下がりのかるぽーと

「並」で勝負の2年目

小笠原雄次



ある日の昼下がり。まだ昼食を食べていない状態で「かるぽーと」に向かっていたら、円筒型のかるぽーとの外観が、なぜかカップのアイスに見えてきた。

お腹が鳴る。さらなる空腹感にたえながら、ビルを見上げると、今度は丼鍋に見えてきた。カツ丼や親子丼を作る時に使う浅くて丸くて、垂直の取っ手のついたやつだ。これでぐつぐつ煮込む。

建物の外観から食べ物の連想ばかりしてしまうのは、ここ（高知市九反田）がかつて高知市の台所、中央卸売市場だったからかもしれない。

昨年四月に開館したかるぽーとの、一年目の総括的な話あるいは厳しい指摘及び、二年目への期待めいたお話がこの稿の依頼内容なのだが、硬い話が苦手なので、強引に食欲系の話にもっていってしまうことにする。

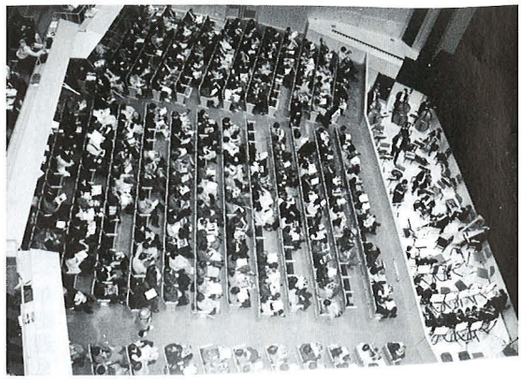
開館の初年度はカツ丼で言えば、まさに「特上」の年だったと言える。特選黒豚のヒレ肉使用。豪華で栄養タップリのメニューが開館記念行事にずらり並んでいた。

開館年は「特上」メニューずらり

大ホールの「ドレスデン国立歌劇場管弦楽団」、「市民ミュージカル『RYOMAの夢』」、「モーリス・ベジャールバレエ団『少年王』」、「ハンガリー国立歌劇場『カルメン』」ほか。小ホールの「詩のボクシング高知大会」や子どもむけプログラムなど。市民ギャラリーの「華やぐパリの芸術家たち展」、「漫画集団展」ほか。横山隆一記念まんが館では「追悼横山隆一展」「青柳裕介展」など。中央公民館でも通常の講座や教室以外に「体験教室」など多彩な催しが行われた。

「特上」級の事業の波状攻撃で、お腹いっぱいのお客さんだったが、使い勝手の面で「かるぽーと総合食堂」には難があると、いくつか厳しい指摘も出された。

曰く、駐車場が狭く、料金が高い。タクシーやバスの車寄せがない。エレベーター乗り場がギザギザで視認性が悪い。大ホールのバルコニーは危なっかしいし、死角がある。ホールの絨毯がふかふかで車椅子が進みにくい。喫茶は三階より眺めがよく人が集まる七階にほしい。各施設の階が違うので、移動が大変、などなど……。



こうした「重箱の隅」ものだけでなく、ずばり、「巨額の建設費、これから毎年かかる運営費に似合う施設活用ができるのか」という、直球の疑問をぶつける人もいる。

ハード的なことはすぐには無理だが、ソフト的には客の指摘を改善していくことはできる。引いては直球の疑問にどうこたえていくか。開館記念の宴が終わった二年目、「かるぽーと総合食堂」の料理人である高知市文化振興事業団の腕にかかってくる。

通常営業での満足度とは

二年目はもう、「特上」のような大盤振る舞いの予算は使えない。開店記念セールは終わって、いわば「通常営業」に入るわけで、メニュー的にも目玉はあるにせよ、「特上」主体から「並」主体にならざるを得ないのである。

予算的にも人員的にもぎりぎりの営業態勢で提供される並の料理群。それでいかにお客に満足してもらうかが勝負。

しかし、しみじみ食べる「並」というものも、これはこれで結構、おいしいものである。予算内で吟味された素材を生かした料理の滋味（この場合は文化の滋味ですか）が、体にじわじわと染み込むようなメニューを用意してもらいたいものだ。

個人的に注文を出させてもらうとしたら、四つの文化施設が複合的に入居している総合食堂のよさを生かしてほしい。県立美術館では企画展とホール事業の連動で、美術と映画あるいは演劇、音楽などがミックスされた料理がいくつか出てきた。

かるぽーとは、他に類のない複合性を持ち、市内中心部という人が集まりやすい立地性にも恵まれている。事業の範囲も漫画、美術、音楽、ミュージカル、演劇、舞踊、生涯学習、文学、出版、学術、ワークショップなど、多岐にわたる。そこに集まる素材を単品料理だけにするのはもったいない。

よさこいとソーラン節からよさこいソーランが、トンカツと溶き卵とご飯からカツ丼が生まれたように、創造は組み合わせの妙だったりする。自前のものだけに限らない。県内の他の文化施設とネットワークして生み出すのもいい。

地のものを使ってじっくり作る料理、今注目のスローフードにも通じる、高知のスローカルチャーをかるぽーとから作り出してほしいという注文だ。

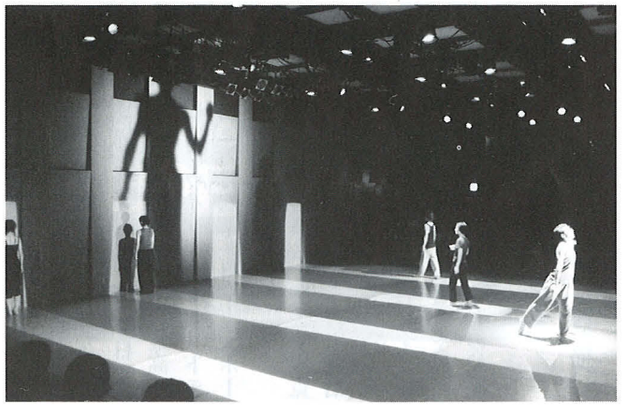
市民による「まぜまぜ」を

そのための仕掛けもお願いしたい。ミックス、組み合わせるのは何も職員だけじゃない。かるぽーとに来る市民、県民、広くは地球人に「まぜまぜ」してもらいたい。ビルのどこかに文化活動に携わる人が気軽に訪れて情報交換したり、企画を立ち上げたりするためのスペースを設けることはできないだろうか。連動するホームページがあればなお、いい。

あらかじめ決まった目的のための「○○運営協議会」とかいうものではなくて、何が出てくるのか分からない集まりにこそ、文化的な面白さがあると思う。

そうなると、当然かるぽーと滞在時間が長くなるわけで、そうなると車で来た人は駐車場代が高くなるわけで……。とりあえず、その辺から着手してほしいなと、腹をすかせた客の繰り言でした。

（おがさわらゆうじ／高知新聞記者）



高知市文化プラザ〝かるぽーと〟は来月四月七日で、開館一年を迎えます。高知市における新しい文化施設として、開館以来、市民の皆様から大きな期待を受けてきました。まだまだそれに十分応えきれているとは考えませんが、手探りながらもなんとか一年が経とうとしています。高知市文化振興事業団では二年目も、限られた予算の中で精一杯努力し〝かるぽーと〟に寄せられた市民の皆様の期待に応えていきたいと考えます。

現在予定されている十五年度事業をご紹介します。

◆注目のソプラニスタ・リサイタル

開館一周年を記念した**岡本知高ソプラニスタ・リサイタル【四月十七日(木)大ホール】**は早々に完売し、**四月二十四日(木)**の追加公演が決定しました。宿毛市出身の声楽家・岡本知高氏は、男性ながら女性ソプラノの声域と成人男性の声量をもつという世界的にも希な存在としていま話題の音楽家です。

昨年に引き続き**第二回詩のボクシング高知大会【四月二十六日(土)小ホール】**に向けて、現在準備が進められています。二人の対戦者がリングの上でオリジナルの詩を朗読し、いかに観客を惹きつけたかを競う〝言葉の格闘技〟です。出場者ならびに大会をお手伝い下さるボランティアスタッフを現在募集中です。

若者に人気のパパイヤ鈴木と西島千博が中心となって繰り広げる男だけのダンスショー、**スーパーダンスバトル2003【五月八日(木)大ホール】**も必見の舞台です。

◆実行委員会との共催事業

高知市文化振興事業団はこれまでにも現代美術の「ポリクロスアート展」や県内若手作家の「市民フロア企画展」などを行ってきましたが、市民による実行委員会と共催により「OVERDRIVE EXHIBITION ～**新しい世代による造形表現**～」**【四月二十九日(火)～五月十一日(日)市民ギャラリー第一・二展示室】**を開催します。県内若手作家十七人(予定)が第一・二展示室の大空間を使い、ジャンルを超えた精力的な造形表現によって「開かれたアート」の可能性を追求しようというものです。

昨年成功裡に終わった高知国体の合唱と吹奏楽の指導をしていただいた本山秀毅と加養浩幸両氏が率いるそれぞれの演奏団体の公演を行います。合唱芸術の粋、**バッハアカデミー関西高知公演【五月二十四日(土)大ホール】**と市民吹奏楽団の最高峰、**土気シビックウインドオーケストラ高知公演【六月二十一日(土)大ホール】**です。

九月にも実行委員会と共催で展覧会「**ヘルマン・ヘッセから宮沢賢治まで 詩人たちの絵**」**【九月二日(火)～二十六日(金)】**を開催します。美術と文学の関係を、宮沢賢治や村山槐多など十四人の百点あまりの絵画で辿ります。

◆芸術の秋は必見の公演が目白押し

まず十月には究極の弦楽アンサンブル、**ウィーン・ヴィルトゥオーゾ高知公演【十月十二日(日)大ホール】**を開催します。世界最高峰のオーケストラ「ウィーン・フィル」の第一コンサート・マスター、ライナー・キュッヒル率いる総勢十三人が来日。「小さなウィーン・フィル」の一分の隙もない緻密な響きをお楽しみ下さい。

お馴染みの**富士通コンコード・ジャズフェスティバル2003【十一月三日(月・祝)大ホール】**はフランク・キャップ・ジャガノート十七人にスー・レイニーがゲスト・ボーカルで参加します。

百年に一度のバレエダンサーといわれ、人気・実力ともにバレエ界の頂点に立つ英国ロイヤルバレエ団プリンシパルのシルヴィ・ギエムが高知にやってきます。**シルヴィ・ギエム『ボレロ』(東京バレエ団全国公演2003)【十一月九日(日)大ホール】**は今年一番の話題のステージとなることは間違いありません。東京バレエ団もモーリス・ベジャール振付作品『春の祭典』『火の鳥』を踊ります。

このほかにも大ホールでの演劇や、小ホールでの実験的なアートパフォーマンス、地元音楽家のコンサート、子どもを対象としたワークショップなどを計画中です。

◆盛りだくさんの横山隆一記念まんが館の展覧会

四月から始まる**「隆一TAKARA(たから)BAKO(ばこ)～第一回所蔵資料展」【四月四日(金)～七月十三日(日)】**では、横山隆一氏より寄贈された多くの資料のうち、常設展示で紹介しきれなかった未発表の資料群の一部を展示します。まんが家というだけではなく、画家・工芸家、そしてさまざまなもののコレクターでもある横山隆一氏の新たな側面をご覧いただきます。フランス・アングレーム市の「国際まんがフェスティバル」を紹介するコーナーも併設します。

夏には、昨年青柳裕介氏を取り上げ好評を博した「高知出身まんが家展」の第二回目として、**「改田昌直展(仮称)」【八月二日(土)～十月五日(日)予定】**を開催します。室戸市出身の改田昌直氏は、都市風俗と風景を独特の画風で描いた作品集「改田昌直のアーバン世界」で第十四回日本漫画家協会大賞を受賞するなど多大な功績を残しています。その芸術性の高い原画から、改田氏の知られざる一面にいたるまでを展示紹介。高知が誇るまんが家・改田昌直氏の世界を体感できる展覧会です。

また、フランス・アングレーム市にあるフランス国立まんが映像センターと友好協定を結ぶ横山隆一記念まんが館として、初めて本格的にフランスのまんが(BD)を取り上げる企画展**「フランスコミック・アート展」【十月十八日(土)～十一月三十日(日)】**を開催。メビウスやエンキ・ビラルをはじめとする十名以上の著名なBD作家の原画を借用、「第九の芸術」として認知されるBDの歴史、制作技法等、あますところなく紹介します。

高知で活動を続ける二つの地元まんがグループによる**「高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会合同原画展」【平成十六年二月二十八日(土)～三月二十八日(日)】**は二年連続で開催予定。『愛』『龍馬の時代を斬る』という二つのテーマの描き下ろし作品で楽しませてくれた地元二団体の新作に期待が高まります。

企画展以外では、**四月五日(土)・六日(日)にまんがフェスティバル**を開催。「まんがシティ」の推進を掲げる大規模なイベントの一回目として、さまざまな催しを計画しています。また、まんが文化普及活動の一環として、まんがライブラリーのさらなる充実、まんが教室の開催なども予定しています。

ぜひかるぽーとの催しで芸術を身近に感じていただくと同時に、かるぽーとが皆様の生活エリアの一部となれるような企画を開催していきたいと思います。

どんなダンスが見られるのか乞うご期待!!

〝スーパーダンスバトル2003〟

高知市文化祭開幕行事

公演『純信 お馬』に寄せて

吉本智賀子

「おまさん、あていをどんなに描く気ながぜよ」

お馬さんの顔が私に迫ってきた。困った…！ どうしよう……。「えーと、土佐文雄さんの原作では……」「本のことじゃないわよ」「多田さんの脚本やったら……」「人の事じゃない」「……」「同じ土佐の女として、あていをどう見るかよよ」「同じ土佐の女じゃ言うたち、お馬さんは、幕末から明治の激動期を生きてきたがじゃろう。うちゃ、昭和と平成に……」「もう、何いいゆうがぜ！」「ほんじゃき、生きてきた時代が違うが！ お馬さんと、うちとは！ お馬さん、ちょうど百年前の明治三十六年、一九〇三年に六十五歳でみてたがじゃろう（合掌）」「もういよいよ、わかっちょらんのう」「……」「昭和か平成か知らんけんど、周りをよう見てみい。絶対大丈夫じゃと思うちょった銀行や大けな会社が危ないじゃの、核じゃの何じゃのいうて妙にきな臭い。幕末から明治の激動期いうておまんさっき言うたがおまんの生きちゅう今じゃち、えらい激動じゃいか。今までの制度が崩れ、新しい価値観が生まれる時ゃ皆あぶつく。それにもうすぐ地震が来るとかいうて言われゆろうがよ。あていが純信和尚と慶全さんの中で青春しゆう時にゃ安政の大地震があった。とうぜよ、よう似いちゅうろうがよ、あていの時代とおまんらあの時代」「そういや、そうじゃねえ」「百年経とうが二百年経とうが、人の気持ちはそうそう変わるもんじゃないと、あていは思うぜよ」「そうか…！」

ある日、私は夢の中で、見たこともないお馬さんと話していた。ちょうど、原作、土佐文雄氏の『～よさこい情話～純信お馬』、それを劇団笛の会主宰多田智昭氏が戯曲化した『純信お馬』を演出・脚色するにあたり、純信・お馬・慶全の三人の人物像に悩んでいた。資料が手元に集まれば集まるほど、わからなくなる。どれが本当なのだろう……。悩んでいる時間はない。とにかく書き始めなければ。

よさこい五十年の今年。お馬さんが逝って百年。すごい偶然！ この時に舞台化しなくていつするの!?と叱られそうな声に後押しされて、時間がなーいと、走りながら考える。

純信・お馬と慶全の三人模様を縦糸に、お馬の両親はじめ五台山村の人々の生活を横糸に、そして村のガキ大将留吉のお馬への淡い恋心も織り込んで、と構想はひろがる。そうなると歌と踊りをちりばめて……。ン？天からの一声、「時間なーい！予算なーい！」とは殺生な。恨めしげに天を仰げども、時間も予算も落ちては来ず。ないないづくしの舞台だとは覚悟をしていたものの、どうしよう……。

「吉本さんの作る舞台はいっつも、キツイね」と言われそうな、がしかし、「やっぱり、よりえいもんにしたい」の一心で、曲作り、振付の日舞、ジャズダンスの先生方に頭を下げる事務局やスタッフの面々、そして私。ごめんね、ごめんねと心では、皆に平謝り。けんど良かったぁ！歌もある、踊りもある。ジャズもある。日舞もある。どんな舞台になるがやろう、この芝居……。こうなったらうんと頑張ってえい舞台を創ろうと、私がやる気を出したら、役者がちょっぴりバテ気味。ここでもごめんよ、ごめんよと心で謝る。空回りか……、笑止笑止。

いつもいつでも、舞台は人の想いでいっぱい詰まっている。表で頑張る人、裏で支える人。そしてそんな私たちが心を込めてお迎えする、舞台を観てともに楽しんで下さるお客様。そんな人たちの想いと熱意でその時その時舞台は変わる……。

四月十九日、二十日の二日間、「高知市文化祭」開幕を飾って、かるぽーと大ホールで、『純信 お馬』を上演いたします。たくさんの方々と笑顔でお会いできるのを夢見ながら、自己満足にならないよう戒め、役者の心と体を本番にピークにもっていけますようにと願いつつ、今日も練習に走っています。

ところで『純信 お馬』の物語の中で一番気になるのは、やはりサンゴのかんざしを買ったのは誰か？だと思います。純信和尚か、慶全さんか……。私は今回、このサンゴのかんざしについて、小さな目撃者を登場させました。その目撃者は純信たち三人の心模様をはじめ村の大人たちの心もちゃんと見ているのです。

（よしもとちかこ／劇団ゆまにて代表）

フランス・アングレーム市 探訪記

奥田奈々美

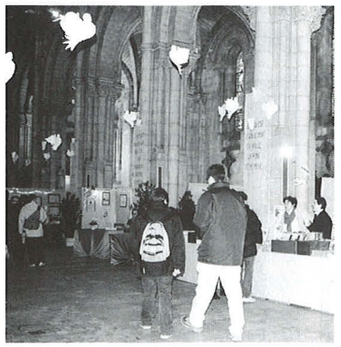
フランス・アングレーム市はまんがが溢れる街である。建物の外壁にまんがが描かれているのも珍しくなく、一見まんがとは無関係の店でもキャラクターが店頭を賑わせている。歩道には、ペイントされた動物の足跡が続く。これをたどって行くと、フランス国立まんが映像センター（CENTRE NATIONAL de la BANDE DESSINÉE et de l'IMAGE。以下CNBDI）に導かれる。昨年四月、横山隆一記念まんが館と友好協定を結んだヨーロッパ随一のまんが文化施設である。

CNBDIは、一九四六年以降のフランスのほとんど全作品のコレクションをもっており、活発なまんが研究が行われている。その研究成果を生かして新しくできた〝想像館（les MUSÉES IMAGINAIRES de la BANDE DESSINÉE）〟は、従来の博物館をまんが風に、というコンセプトでつくられている。〝自然科学博物館〟とされたコーナーでは、二本足で歩く犬、人間のことばを話す犬など、まんが独特の表現方法を、動物の進化過程としてユーモアたっぷりに紹介。その他、フキダシの標本、人間化したサボテンなど、おもしろおかしく展示している。一転、〝歴史博物館〟では、フランスのまんがの歴史について、時代別にわかりやすくまとめており、見応えがある。また、まんがの技法別展示、制作過程の紹介など、単におもしろいだけでなく、ためになる工夫が凝らされていた。

まんがの溢れる街、アングレーム市の中心部

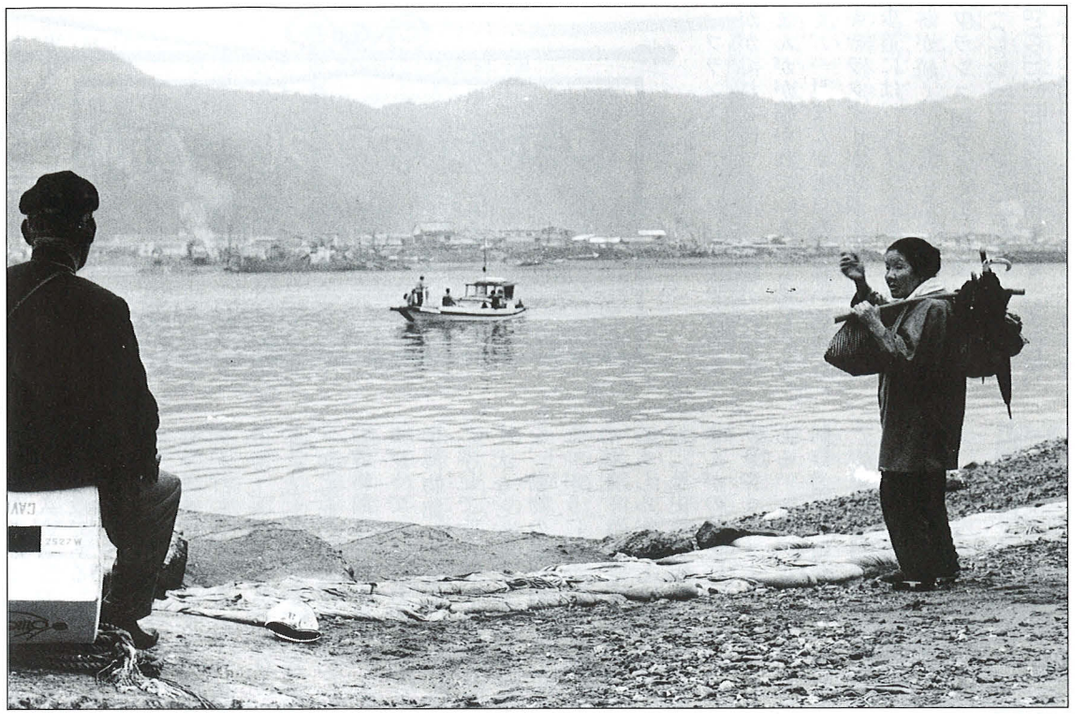
このCNBDIがいつにも増して賑うのが、毎年一月最終週にアングレーム市で開催される「国際まんがフェスティバル」の時期である。フェスティバルのチケットがあれば、全会場、CNBDIなどの施設への入場も可能となることから、この機会に訪れる来館者が多いのであろう。CNBDIはフェスティバル会場から少し離れた場所にあり、歩くと十分程度要するが、その差を埋めるためにフェスティバル専用バスが走っている。まんがキャラクターで彩られたバスが十五分おきに出ており、利用者も多く、需要の高さが窺えた。

「国際まんがフェスティバル」では、街のあちこちに仮設された巨大なテント張りの建物を利用し、まんが本やグッズの販売、イベントなどが行われている。まんが家本人の直参するブースも数多く、例年多くのまんがファンが詰めかける。また、会場はテントや施設だけにとどまらない。街の中央部にある教会でさえ、まんがフェスティバルの会場となっていた。そこには、通常の販売ブースと合わせて、立体的につくられた白い紙の鳩が教会の雰囲気を壊すことなく飾り付けられていた。また、聖書をテーマとしたまんが展示もあり、教会という場所を生かしつつユーモアで彩る工夫が施された会場であった。来場者はもちろんのこと、出展者、参加者が楽しんでつくる空間、それがこの「国際まんがフェスティバル」であると感じた。


会場となった教会に紙の鳩が舞う

アングレーム市は、現在、新たにまんが文化施設の建設を予定しているという。CNBDIの〝想像館〟と同様に、従来の博物館展示をまんがでアレンジするもので、さらに規模が大きいものになるとのことである。街全体でまんがを盛り上げるアングレーム市は、ヨーロッパまんが文化のさらなる発展のため、大きな役割を果たしている。まんがシティの推進を目指す高知にとっても、学ぶところの多い街である。

（おくだななみ／横山隆一記念まんが館学芸員）



高知を撮る　**渡し船を待つ人**（昭和40年頃　土佐市）

第18回写真コンテスト入賞作品

宇佐の渡し船を待つ人。
井尻側で待っている人を撮る。

山崎　章男

田中さん

風俗歳時記

二〇〇二年は田中さんの当たり年だった。年明けの真紀子さんに始まり、夏の康夫さん、晩秋の耕一さんまで、それぞれがワイドショーに大きく貢献した。およそ関係のない世界に住む三人だが、どこか共通の「爽やかさ」で人々を引き付けたから面白い。

爽やかであるためには、無闇に化粧しないことが大切である。人々は日頃耳にする、「建て前」「思惑」「格好」などで、厚く塗り固められた言葉に飽き飽きしている。

三人の何よりの共通点は、自分の言葉で話したことである。個性的な言葉は、個性的な人生から生み出されるが、そのような人生は、それに相応（ふさわ）しい社会的、文化的背景によって支えられていることが多い。

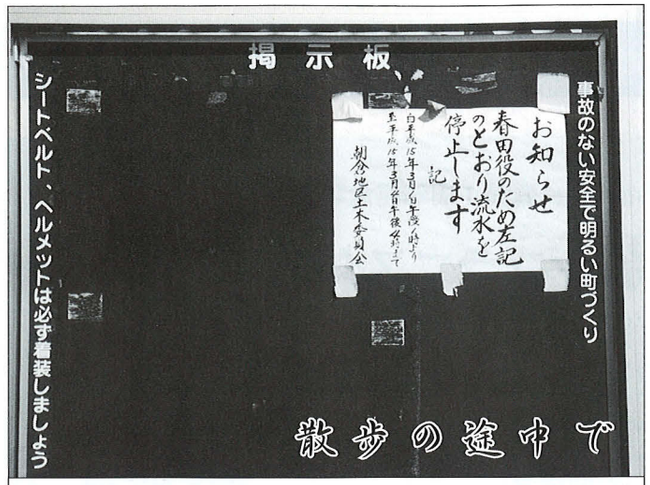
ここでは、耕一さんのことだけを考えよう。京都木屋町二条に、初代・島津源蔵が、教育用理化学機械製造を業とする、「島津製作場」を設けたのは一八七五（明治八）年のことである。以来、一三〇年近く、営々と理化学機械の開発・製造を続けてきた老舗（しにせ）が、現在の「島津製作所」で、耕一さんの勤め先である。

暖簾（のれん）の古さだけで生き残れないのは、どの業界も同じである。「島津」では、代々「科学技術の普及を通じて人類社会に貢献」（島津創業記念資料館案内より）できるよう、地道な研究が続けられてきた。二代目源蔵は医療用エックス線装置や蓄電池の開発で名を残した。彼は、一九三〇（昭和五）年に、我が国十大発明家の一人に選ばれている。日常見かける「GSバッテリー」のGSは島津源蔵のイニシアルである。

ノーベル賞は偶然だけからは生まれてこない。「島津」の雰囲気は田中さんにとって、適度の刺激のある居心地のいいものであったに違いない。そのような「適度の刺激を伴った居心地の良い環境」こそ、良い研究業績を生み出す土壌であり、大学や研究所の何よりの宝である。

最近、大学や研究所に見られる、目まぐるしい「改革」は、はたして、このような雰囲気作りと関係があるのだろうか？

（路）



「田役」という言葉が今もこんなにさりげなく使われているとは知らなかった、と言うと、ご年輩の向きに叱られるだろうか。

ところどころにたんぼが残っているとはいうものの、すっかり市街地となってしまった朝倉地区の町内掲示板で目にした。普通の町の暮らしの中に、昔からの営みが残っている。

「春田役」という言葉に似合いの、早春のうららうらと暖かい日だった。

風俗

狂育はごめん

教育基本法が見直されようとしている。「子供たちを健全に育てよう」とした人格主義では、国を愛するといった理念が生まれない、とするものだ。文部科学省は昨春、『心の春』なる冊子を小中の全員に配布した。強制ではないといいながら、指導書によれば「各教科等の内容と関連させて、道徳の学習を充実させていくためのもの…」とある。実質は国定教科書の出現であろう。

国を愛する心は故郷を思い、肉親を愛する気持ちに通じる自然な感情で、強要されたり、権力の介入を受ける筋合いのものではないだろう。人間性の発展よりも、国家目標が優先するとした戦前の教育が、どれだけの犠牲を生んだか、今さら言うまでもあるまい。

むしろ問題は、現行の基本法精神がどれだけ定着しているか、はなはだ疑問な点だ。最近の事、高知市内のPTA活動に触れる機会を得、愕然とした。地域の保護者との連携によって、まっとうな教育を実現させようとして来たのが運動の歴史だったと思うのだが、今では地域に残っているPTA組織は数少ないという。その代わりに、行政の指導する児童会が生まれているが、自主性の喪失はいなめないだろう。教育に政治の思惑が働いて、理念も実態も変えられて行くのは危険性大と言わざるを得ない。

（3）

MUSEUM SHOP
Kochi-City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods
Artist goods
Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tell 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「四ツ橋風景」　近石春江

かるぽーと建設前の四つ橋付近の風景です。堀割交差に架けられていた四つの橋のうち、平成まで残っていた幡多倉橋と菜園場橋も九反田の再開発にともない姿を消しました。

変わりゆく風景をキャンバスに残そうと、４年半前の展覧会に出品した作品ですが、今ではかるぽーとがすっかり九反田のシンボルになっていると思います。

（ちかいしはるえ）

文化高知 No.112 [隔月発行]
2003年(平成15年) 3月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-3-14869

高知市文化プラザかるぽーと 平成15年度事業のご案内

■高知市文化プラザかるぽーと 開館1周年記念事業

岡本 知高 ソプラニスタ・リサイタル

ソプラニスタとは、女性ソプラノの声域と成人男性の声量を合わせ持った成人男性ソプラノ歌手を指し、その存在は世界的にも類を見ないとされています。
日本人では唯一の存在として、今後多大なる活躍が期待される岡本知高の"奇跡の歌声"を、かるぽーとでぜひお楽しみ下さい。

4月17日公演完売につき追加公演開催決定

4月24日(木) 18:30開場 19:00開演
全席自由 一般：3,000円 高校生以下：2,000円

大ホール

第2回 詩のボクシング 高知大会

Japan Reading Boxing Association Official Poetry Boxing

リング上で自作の詩を朗読し、観客の代表によるジャッジによって勝敗を決める「言葉の格闘技」。全国大会への切符を賭け、１６名の朗読ボクサーによる熱い戦いが繰り広げられます。
４月１３日の予選会に向けて、ただいま朗読ボクサー・ボランティアスタッフ募集中。

4月26日(土) 12:30開場 13:00開演
全席自由 1,500円

小ホール

パパイヤ鈴木 & 西島千博 with Bugs Under Groove

SUPER DANCE BATTLE 2003

人気絶頂のダンサー・パパイヤ鈴木と、スターダンサーズバレエ団の西島千博をはじめ、日本のダンスシーンの第一線で活躍するダンサーによるユニット、Bugs Under Grooveによるジャズあり、ヒップホップあり、バレエあり、様々なダンスが火花を散らす、究極のダンス・エンタテイメントです。

5月8日(木) 18:30開場 19:00開演
全席指定 6,300円

大ホール

お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 http://www.bunkaplaza.or.jp

http://www.bunkaplaza.or.jp E-mail bunshin@i-kochi. or. jp